

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

今月のこのコラムは、9月2日に北米二ユーヨーク州のサラトガ競馬場で行われたG1ウッドウォードS(d9F)を圧勝してG1・3連勝を果たした、ガンランナー(牡4)を主役として取り上げたい。

ガンランナーは、ベンジャミン・レオン氏のベシル・ステーブルスによる生産馬だ。母のクワイエットジャイアント(その父ジャイアンツコーズウェイ)は現役時代、エドワード・エヴァンス氏の自家生産馬として12戦し、G2モーリーピッチャース(d8.5F)を含めて7勝を挙げた活躍馬だった。エヴァンス氏が10年の大晦日に亡くなると、競馬事業の後継者がおらず、200頭以上いた所有馬は翌年、市場に一斉放出されることになった。そんな中、キンシマンド・ノヴェンバーセールに上場された当時4歳のクワイエットジャイアントを300万ドルという高額で購買したのが、ベンジャミン・レオン氏であった。上質の競走成績ではあるものの、300万ドルというのは高すぎるようにも見えるが、同馬の半兄にG1BCクラシック(d10F)など4つのG1を制し全米年度代表馬に選出されたセイントリームが、同馬の姉にその年のG1マザーグースS(d8.5F)勝ち馬バスター・ズレディがいるという、極上の血統背景が加味された購買価格であった。

ちなみにレオン氏は同セールで、クリ

ス(当時18歳)を80万ドルで、クワイエットジャイアントの半妹にあたるダンスクワイヤー(当時3歳、父エーピーインディ)を200万ドルで、同じくクワイエットジャイアントの半妹にあたる父メダグラードの当歳牝馬を260万ドルでリアド一口の当歳牝馬を260万ドルで購入しているから、よほどこの牝系を気に入り、大物が出るとの確信を持っていたことが窺える。

12年の春に繁殖入りしたクワイエットジャイアントがキヤンディライドを交配され、13年に産んだ初仔がガンランナーだから、レオン氏の診立てが正しかったことが早くも証明されることになった。

庭先売買によって、レオン氏と関係の深いレーンズエンドファームと、ロン・ウィンチエル氏のパートナーシップの所有馬となつたガンランナーは、スティーヴ・アスムス(17年3月のドバイワールドC)、2度ともアロゲイトの勝利に終わっているが、半年前と比べれば、一回りも二回りもスケールアップしているのが現在のガンランナーである。一方のアロゲイトは、ドバイから帰国後2連敗と、こちらは半年前までの圧倒的な輝きに翳りが出来ているのが現状だ。

ス(当時18歳)を80万ドルで、クワイエットジャイアントの半妹にあたるダンスクワイヤー(当時3歳、父エーピーインディ)を200万ドルで、同じくクワイエットジャイアントの半妹にあたる父メダグラードの当歳牝馬を260万ドルで購入しているから、よほどこの牝系を気に入り、大物が出るとの確信を持っていたことが窺える。

12年の春に繁殖入りしたクワイエットジャイアントがキヤンディライドを交配され、13年に産んだ初仔がガンランナーだから、レオン氏の診立てが正しかったことが早くも証明されることになった。

庭先売買によって、レオン氏と関係の深いレーンズエンドファームと、ロン・ウィンチエル氏のパートナーシップの所有馬となつたガンランナーは、スティーヴ・アスムス(17年3月のドバイワールドC)、2度ともアロゲイトの勝利に終わっているが、半年前と比べれば、一回りも二回りもスケールアップしているのが現在のガンランナーである。一方のアロゲイトは、ドバイから帰国後2連敗と、こちらは半年前までの圧倒的な輝きに翳りが出来ているのが現状だ。

BCを舞台としたアロゲイトvsガンランナーは、必見の戦いとなりそうである。

制覇を果たしている。

だが、同馬が本格化したのは4歳を迎えた今季で、3月のG1ドバイワールドC(d2000m)ではアロゲイトに2.1/4馬身及ばぬ2着に敗れたものの、帰国緒戦となつたG1ステイビング・オースターS(d9F)を7馬身差で圧勝。続いて出走したG1ホワイトニーS(d9F)を5.1/4馬身差で制して臨んだのがG1ウッドウォードS(d9F)で、ここも2着以下に10.1/4馬身という大差をつけて快勝したガンランナーは次走、11月4日にデルマーで行われるG1BCクラシック(d10F)に向かうことが既に発表されている。